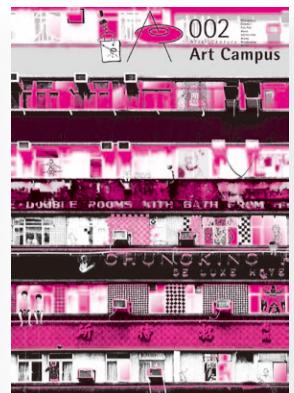


034
After Century
Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design



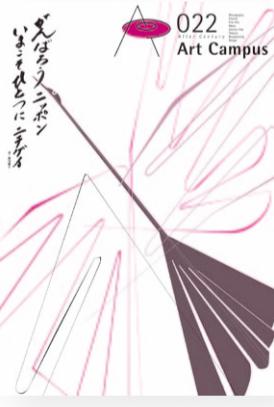
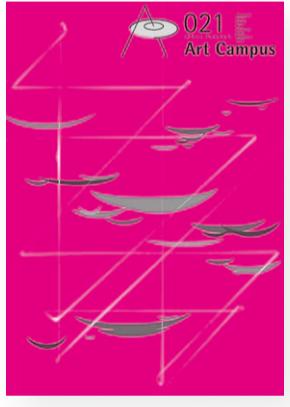
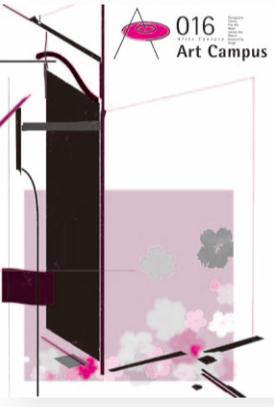
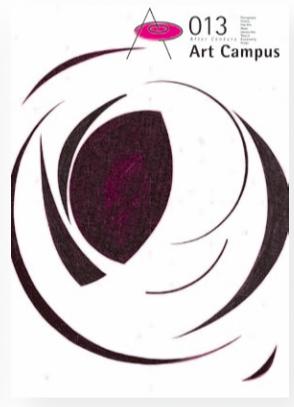
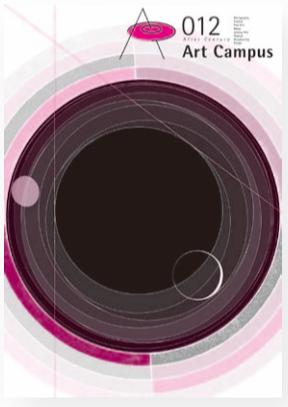
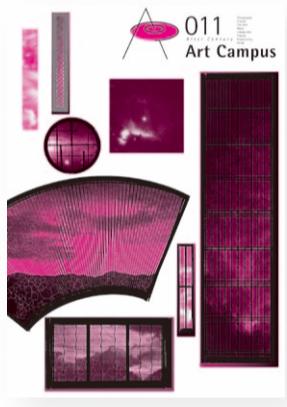
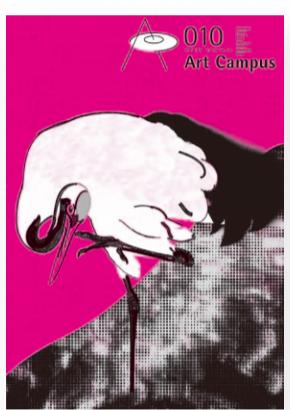
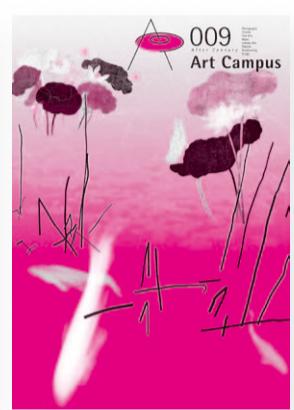
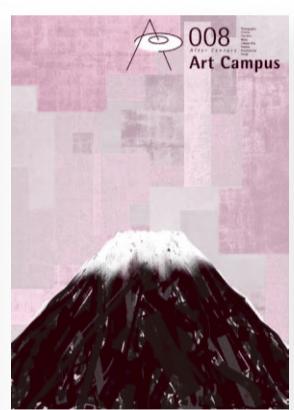
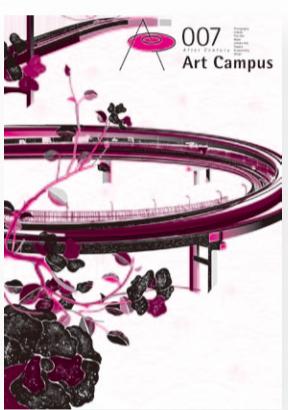
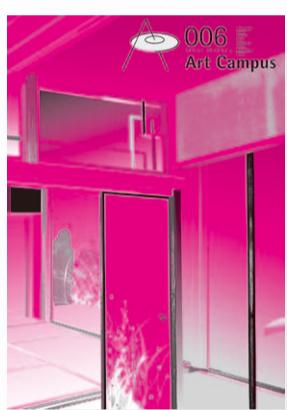
11年前、広報担当だった私は日藝の広報誌をもっとエキサイティングにしようと企画し、現在のACになりました。全体のエディトリアルデザインを井原講師にお願いしたのは、その素晴らしい感性で力強さを表現して欲しかったのと、アートフルな表情を広報誌全体に持たせたかった目的を実現してくれる実力の持ち主だったからです。一貫性のあるデザインとそのポリシーは、見事に日藝の広報誌としての存在感を一新したと誇りを持っています。

11年間続けることの難しさと達成感は誰よりも共感することができます。何でも早く安くの時代に、特に印刷技術を駆使したデザインが斬新でした。表現技術を大切にしたデザインは日藝の広報誌に最も相応しいイメージを固定し続けました。

次号から新しい広報担当のもとに、新しい企画の日藝広報誌が誕生します。

井原先生、本当にご苦労様でした。そして校友として、デザイン学科の講師として、新しい広報誌にまた何らかの形でご協力をお願いします。

心よりお疲れさまでした! _____ デザイン学科教授 木村政司

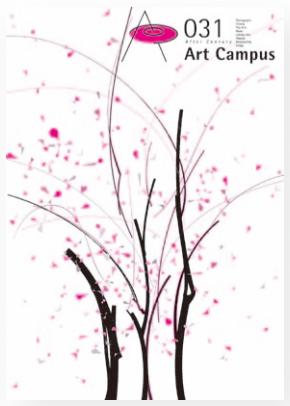
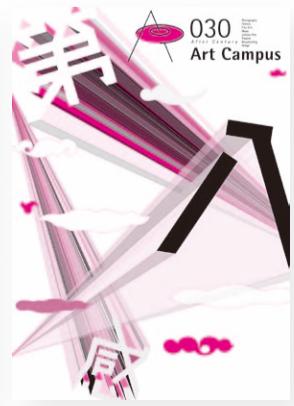
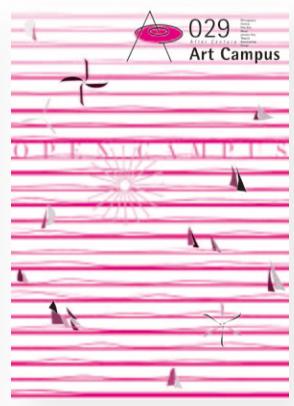
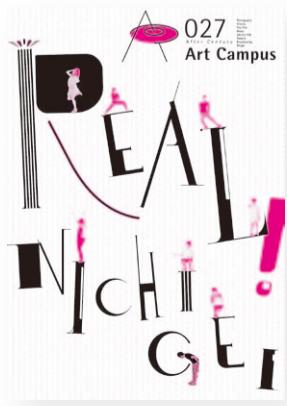


この企画を立案・推進された木村政司教授から、日藝のエネルギーを伝えるものを…とお声がけいただきデザインを担当させていただきました。第1号が2004年4月ですからもう11年になります。これまでの読み物的な広報誌から、A3という大判で観て感じるビジュアル誌へ…という編集方針のもと、日藝らしくダイナミックで遊び心のあるページデザインが誌面コンセプトでした。

そのなかで表紙は、様々な表現を志す日藝生をイメージし、「アートの入り口→好奇心」を基本コンセプトに、季節を意識しつつ「現代風景」「建築空間」「JAPAN」「宇宙的リズム」「音楽」「舞台芸術」等、各号テーマをすべて制作しました。毎号かなりアタマを悩ませましたが、2色印刷の可能性とグラフィック表現の実験的な挑戦でもありたい…という内なるテーマをもっていましたので、表現の新しい発見があったり、予想をこえる印刷効果が出たときなど非常に手応えを感じました。そして大胆な構成を試みたときでも中島安貴輝先生制作のACロゴがピリッと締めてくれました。毎号メタリックインキの上に特色インキを乗せる難しい印刷設計でしたが、担当してくださった印刷会社の最大限インキを盛った引き締まった印刷で、メタリック感とマット墨の掛け合わせ効果がうまれています。

ビエ・ブックス発行の「ネオジャバネスクグラフィックス」「ネオジャバネスクデザイン」「モダンジャバנסスタイルデザイン」に005-007、009-011、015-017号の表紙が紹介されました。

井原 靖章 (グラフィックデザイナー・デザイン学科非常勤講師)



「成長」の軌跡。

その時、その時の思いを込めて創りあげる作品には、
その時、その時の自分がいる。
作品の軌跡は、自分自身の成長の軌跡。
新しい自分に出会うために、新たな作品を創り続ける。



文芸学科 4年

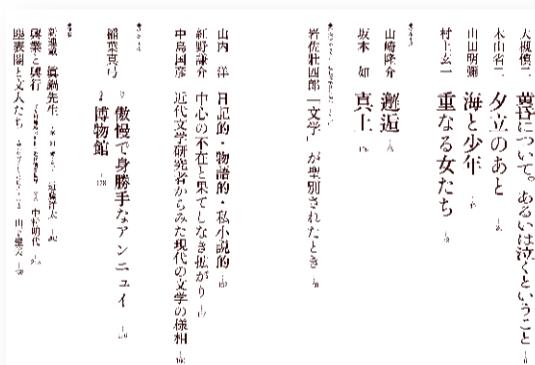
山崎 隆介さん

★『江古田文学』で作品を発表

日本大学芸術学部の江古田文学が年3回発行する『江古田文学』。毎号、学生による優れた文学作品が掲載され、学内外で高い評価を得ている。その『江古田文学86号』(平成26年7月発行)に、山崎隆介の作品が掲載された。タイトルは「邂逅」。主人公である無気力な高校生が、いじめにあって小学生を救おうとして、自らも無気力から脱却していくというストーリーである。

彼が小説を書き始めたのは小学校3年の時。国語の授業で「宝の地図」を題材とした物語を書いたことがきっかけだった。「みんなは原稿用紙に3・4枚書いていましたが、30枚書いて先生に褒められました。それがうれしくて、この時から小説のようなものを書くようになりました」。

運動部に所属していたため忙しく、ペースダウンしたものの中、高校に進学しても書き続けた。しかし「書いていることは友達はもちろん、家族にも隠していました」と山崎は言う。日藝に入り、山崎は初めて隠さず、堂々と書き、人に読んでもらう喜びを知った。『江古田文学』に掲載された小説は、初めて多くの人に読んでもらった作品なのである。



★“劣等感”から逃れるために

『江古田文学』に発表した作品もそうだが、彼の書く作品の主人公は中学生、高校生である。その理由について山崎はこう答えた。「中高生が大人になっていく過程での心の葛藤に興味があります。その世代を書くことによって、若者が抱えるさまざまな葛藤を表現していきたい」。

小学生時代、成績も良く、運動もできた彼は周囲から見ると何の問題もない子供だった。が、山崎の中には5つ上の兄と3つ上の姉に対する“劣等感”が常にあった。「上の二人が優秀だったので、いつも比べられていました。特に兄は勉強もでき、スポーツも万能。兄に追いつきたいという気持ちが、どこかにあったのでしょうか。兄が野球をやっていたので自分も野球部に入り、兄が通う県立高校を受験しました。県立高校には合格できず、結局私立高校に入りましたが、このことでさらに劣等感が強くなりました」。

作家を目指す人の多くがそうであるように、山崎は本を読むことも好きだった。しかも小学生の時に読んでいたのは純文学。「友達と同じ本は読みたくない」と当時を振り返る。兄は理系で、山崎は文系。小説を書き、純文学を読んだのは、兄と比較されない自分の得意分野で自分を表現したいという気持ちがあったから。「小説は、自分にとって劣等感から逃れるためのツールだったような気がします。だから今、当時感じた葛藤する気持ちを表現したいと思うんですよ」。

★もっと書きたいという気持ち

悲しさ、寂しさ、疎外感…さまざまな感情が入り混じった劣等感から解放された今、「ただ書くことが楽しい」と山崎は言う。劣等感が原点だったとはいっても、小さい頃から読んできた本から得たもの、書き続けることによって得たものは確実に彼の中に宿り、現在も役立っている。「冒頭で悩むことはありますが、それを乗り切れば一気に書く。1日に原稿用紙30枚を書くこともあります。江古田文学で発表した作品も、1日で書き上げました」。

大学に入ってから、文芸誌などが主催するいくつかの文芸賞に応募した。応募する際は事前に先生に読んでもらい、感想やアドバイスをもらうようにしている。「小学校の時、先生に褒められて小説を書き始めたように、今も内容や構成を褒めていただくうれしいですね。もっと書きたいという気持ちが湧いてきます」。

小説を書き、読むことによって劣等感から脱却した山崎は、彼と同じように葛藤しながら懸命に生きる若者たちに、小説という形でエールを送り続ける。

◆ 心の葛藤を乗り越えて。……「劣等感」から生まれた「自信」。

美術学科 彫刻コース4年

森下 聖大さん



★「遊び」が創作の原点

物心ついた頃からモノを創ることが好きだった。木端や粘土で人形を作ったり、武器のようなものを作って遊んだり。その頃のモノ作りの先生は、祖父だった。「大工をしていた祖父の家の遊びに行くと、木片やのこぎりなどの道具類が充実していました。道具の使い方は祖父に教えてもらいました」。小学校4年からは、家の近くの美術教室へ。美術教室には大学に入るまで通っていたが、いわゆる予備校ではなく、自由におもちゃを作り、自由に遊び、自由に表現することのできる場所だった。

いわば「遊び」の中で育まれ、確立された、森下聖大のモノ作り。「高校の選択科目で美術コースを選び、油絵、デッサン、デザイン、カメラなどを学びましたが、受験の際も美術の予備校には通わず、大学に入るまで美術教室に通っていました」。小さい頃からモノを創り続けてきた彼にとって、創ることはイコール遊び。少なくとも日藝に進学するまでは、そう信じて疑わなかった。

★「学び」によって得たもの

「大学で彫刻を学んで、モノ作りへの考え方方が180度変わりました」と森下は言う。今まで頭の中にあるイメージを、自由に形にすればよかった。しかし日藝で木や石膏、素焼粘土(テラコッタ)、鉄などの素材に触れ、彫刻を根本から学ぶことによって、遊びの中から育まれた彼の中の“モノ作り”への考えは一変した。「頭の中の何かを作りたいという創作意欲は変わっていませんが、そこからどういう表現でアプローチするかという考え方の方が変わったと思います。どんな素材を使うか、コンセプトをどうするか、そのためにどういう手法を用いればいいか…。作品を一つの物体として捉えた時に、それをどのような形で構成していったらよいか、ということを考えながら作るようになりました」。

「遊び」の中で磨いてきた森下のモノ作りに、学ぶことによってさらに豊かな表現力が備わった。「大学に入る前の作品を見ると、めちゃくちゃだったと思います。過去の作品を見ても、『まだまだ作りこめるな』『もっと、こうすればよかった』と気付くことが多いんです」。

★大学でしかできないことを

たくさんの作品を創っていく中で、創りたいモノも見えてきた。人間の肩から首、頭を表現する「首像」である。なぜか昔から人の頭部や顔の表情に興味があった。潜在的に好きだった頭部をモチーフとした「首像」をメインにした制作を続いている。完成した作品は、美術展にも出展。これまで第41回川口市美術展(平成25年)、第42回川口市美術展(平成26年)に出展し、第41回は議長賞、第42回は市長賞を受賞した。また、越後妻有(新潟県十日町市)を舞台に3年に1回開催される世界最大級の国際芸術祭「大地の芸術祭越後妻有アートト

リエンナーレ」に日
藝の有志とともに
参加し、地域の人
たちとの交流を深
めながら制作など
様々な活動を行っ
ている。「発表の場
を得ることで、作
品を通して見てく

ださる方とコミュニケーションを図ることができるので、すごく楽しいですね。何かを伝えたいという想いはもちろん、自分が伝えたいことに忠実に、わかりやすく創りたいと思っています」。

日藝に入る際、絵画にするか彫刻にするか迷ったが、設備の整った大学でしかできないことをしたいと思い、彫刻の道を選んだ。「現段階では卒業制作も首像を創りたいと考えています。4年間の集大成として、満足のいく作品を制作したいですね」。巨大な木が積まれ、クレーンや木材を加工する大型機械に囲まれた彫刻の制作室には、毎日夜遅くまで作品創りに没頭する彼の姿がある。「大学生活が楽しくて仕方がない!」と言う森下の瞳は、目を輝かせて粘土創りに熱中する幼い子供のようだった。

彼がテーマとして探究し続けてきた「首像」。「今は何を伝えたいかというより、頭の中にあるイメージを素直に表現することを第一に考えています」。



最近、好んで使用するのは「木材」。「木の香りも好きだし、削り、そぎ落としていく工程も好き」と森下は言う。作品と一緒に向き合い、木と会話をしながら、作品に命を注いでいく。



第9回 日藝賞は、荒井良二氏と

荒井良二

Ryoji Arai

日本大学芸術学部美術学科(昭和54年度卒業)
絵本作家・イラストレーター

【略歴】

1956年山形県生まれ。日本大学芸術学部美術学科卒業後、小説の装画、挿絵、広告、舞台美術、アニメーションなど幅広く活躍中。2010年、12年と山形にて展覧会「荒井良二の山形じやあにい」を開催、12年10月に放映のNHK朝の連続テレビ小説「純と愛」のオープニングイラスト、タイトルを担当。14年には「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014」にてアーティスティック・ディレクターを務める。

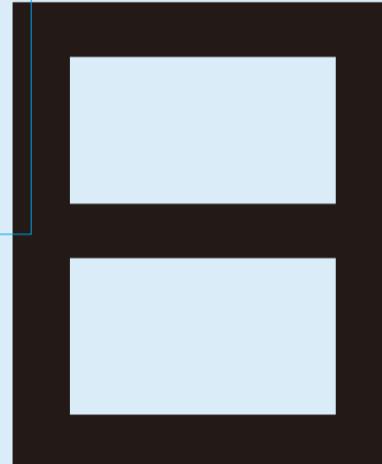
【主な受賞歴】

玄光社主催 第4回チョイス 入選
イラストレーター賞年鑑イラストレーション 新人賞
「ユックリとジョジョニ」キーツ賞出展
アストリッドリンダグレーン記念文学賞 2005年
「うそつきのつき」(内田麟太郎・文/文溪堂) 小学館児童出版文化賞
「なぞなぞのたび」(石津ちひろ・文/フレーベル館)
ボローニヤ国際児童図書展特別賞
「森の絵本」(長田弘・文/講談社) 講談社出版文化賞絵本賞
「ルフランルフラン」(ブチグラバブリッシング) 日本絵本賞
「スキマの国のボルタ」(NHK教育テレビ)
文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞
「たいようオルガン」(偕成社) 第一回 JBBY賞
「あさになったので まどをあけますよ」(偕成社)
産経児童出版文学賞大賞

【主な作品】

バスにのって 偕成社 | はじまりはじまり プロンズ新社
クルヨ・クルヨ 白泉社・1994年 | ポプラ社・2008年 | スースーとネルネル 偕成社
そのつもり 講談社・1997年 | みちくさ劇場 あかね書房・1999年
ぼくのキュートナ 講談社・2001年 | ぼくがつぼくにちぼくようび 平凡社・2001年
はっぴいさん 偕成社・2003年 | ようかい アニミちゃん 教育画劇・2004年
おばけのブルブル 講談社・2004年 | ぼくとチマチマ 学研・2004年
にせニセことわざずかん のら書店・2004年
ルフランルフラン2本のあいだのくにへ ブチグラバブリッシング・2006年
きょうというひ BL出版・2005年 | ぼくのおとぎ話からの手紙 フレーベル館・2007年
つづきの国のワークブック コクヨS&T・2007年
ぼくのきいろいバス 学研・2007年 | ヒメちゃん 小学館・2008年
えほんのこども 講談社・2008年
うちゅうたまご イースト・プレス・2009年
Pooka + 荒井良二 日常じやあにい 学研・2009年
meta めた FOIL・2010年
モケモケ フェリシモ出版・2010年
ぼくはぼくのえをかくよ 学研・2010年
ホソミチくん イースト・プレス・2011年
どこから どこまで いつ どうやって パッドニュース音楽出版・2011年
ねんどろん 講談社・2012年
ぼくときみとみんなのマーチ 学研・2012年
なんていいんだ ぼくのせかい 集英社・2012年
ねむりひめ NHK出版・2012年
ぼくの絵本じやあにい NHK出版・2014年
わらうほし 学研・2014年
イノチダモン FOIL・2014年
じゅんびはいいくらい 学研・2015年
ほか共著作品多数。

第9回



幸運

日藝賞とは、芸術学部に在籍していた人で、
に貢献し、芸術を志す学生の夢の対象とな
第9回日藝賞は、2014年11月6日から27日ま
等の投票により選出された候補者の中から、
荒井良二氏(昭和54年度美術学科卒業・絵本作
放送学科卒業・脚本家)に決定しました。
授賞式は2015年4月4日の入学歓迎式の中
と、名前が刻まれたクリスタル製の記念トロ

第8回	坂田栄一郎 (写真家)	松崎しげる (歌手・俳優)	第7回	森田公一 (音楽家)	第6回	船越英一郎 (口ボソトデザイナー)	第5回	林真理子 (小説家)	青山剛昌 (漫画家)	市川團十郎 (歌舞伎俳優)
-----	----------------	------------------	-----	---------------	-----	----------------------	-----	---------------	---------------	------------------



中園ミホ氏に決定!

Miho Nakazono

日本大学芸術学部放送学科(昭和56年度卒業)
脚本家

【略歴】

1959年東京生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒業後、広告代理店勤務、コピーライター、占い師の職業を経て、88年にテレビドラマ『ニュータウン仮分署』で脚本家としてデビュー。その後も『Age, 35 恋しくて』『不機嫌な果実』『やまとなでしこ』『anego』『ナサケの女～国税局査察官～』『下流の宴』など、テレビドラマを中心に数多くの作品を執筆する。2007年に『ハケンの品格』が放送文化基金賞と橋田賞を、13年には『はつ恋』『Doctor-X 外科医・大門未知子』で向田邦子賞と橋田賞を受賞。14年はNHK連続テレビ小説『花子とアン』を執筆、朝ドラ過去10年間で最高視聴率を記録するなど話題となる。徹底した取材を通じてのリアルな人物描写には定評があり、特に女性の本音に迫るセリフは多くの視聴者から共感を得ている。また、『東京タワー』『ゴースト～もう一度抱きしめたい～』等の映画脚本も担当。日本大学芸術学部客員教授。

★ I ★ G ★ E ★ I
EXCELLENCE

日藝 賞

著しく日藝の名声を高め、その業績が社会
人に贈られます。
で、在校生、教職員、芸術学部校友会役員
日藝賞選考委員会で業績などを検討の結果、
家／イラストレーター)と中園ミホ氏(昭和56年度
で行われ、2名の受賞者にはそれぞれ賞状
フィーなどが授与されます。

第4回	第3回	第2回	第1回	歴代受賞者
宮嶋茂樹 (俳優)	宮藤官九郎 (脚本家)	大石芳野 (脚本家) (ドキュメンタリー写真家)	佐藤隆太 (俳優)	三谷幸喜
真田広之 (報道カメラマン)	田中裕二 (脚本家)	田中裕二 (脚本家)	太田光 (脚本家)	爆笑問題

【主な作品】

- ニュータウン仮分署 テレビ朝日・1988年
世にも奇妙な物語 CX・1990~1991年
白鳥麗子でございます! CX・1993年
For You CX・1995年
ラスト・ラブ NHK・1995年
Age, 35 恋しくて CX・1996年
Dear ウーマン TBS・1996年
不機嫌な果実 TBS・1997年
ラブとエロス TBS・1998年
恋の奇跡 テレビ朝日・1999年
やまとなでしこ CX・2000年
スタアの恋 CX・2001年
ぼくが地球を救う TBS・2002年
ハコイリムスメ! CX・2003年
恋のから騒ぎドラマスペシャル NTV・2004~2007年
anego NTV・2005年
ハケンの品格 NTV・2007年
あの日、僕らの命はトイレットペーパーよりも軽かった。
～カウラ捕虜収容所からの大脱走～ NTV・2008年
ナサケの女～国税局査察官～ テレビ朝日・2010年
下流の宴 NHK・2011年
専業主婦探偵 私はシャドウ TBS・2011年
はつ恋 NHK・2012年
Doctor-X 外科医・大門未知子 テレビ朝日・2012~2014年
花子とアン NHK・2014年
Dr.倫太郎 NTV・2015年

【エッセイ】

恋愛大好きですが、何か? 光文社・2007年

【受賞歴】

- 「ハケンの品格」
放送文化基金賞および橋田賞 2007年
「はつ恋」「Doctor-X 外科医・大門未知子」
向田邦子賞および橋田賞 2013年

中
園
ミ
ホ





SEISHUNの君たちへ

異色の経歴から

増子瑞穂 ○美術学科(現デザイン学科)
インダストリアルデザインコース
平成6年度卒



フ リーアナウンサー、MCの増子瑞穂です。インダストリアルデザインコースの卒業生です。プライベートでは小学生の息子と保育園児の娘、二児のお母さんです。卒業後、イベントMCなどを経て、NHKでフリーのキャスター・リポーターとして情報番組や広報番組などを担当しました。2人の子供を出産後、本格的に仕事を再開。現在は、電車関係のイベントMCやインターネット番組のニコニコ生放送で報道系情報番組などを担当しています。はい、デザインコース。放送学科卒業ではありません。なぜ、デザインコース卒業でアナウンサー?と疑問を持たれることでしょう。私自身も異色の卒業生と自覚しております。アナウンサーというとニュース原稿を読む仕事、というイメージをお持ちの方もいらっしゃるかと思います。もちろん、与えられた原稿を正確に読む仕事をすることもありますが、私の仕事はフリートークが多いです。あらかじめ興味を持って調べて、情報として伝えたり、文章にまとめたり、人にインタビューしたり。インダストリアルデザインコースで学んだプレゼンテーションに近いと感じます。デザインと同じ、一つ一つ積み重ねて作り上げていくクリエイティブさがある。そして人とのコミュニケーションもとても大切です。もちろん、お母さん業も365日24時間体制で兼務。子育しながらの仕事は大変だし時間の制約もありますが、だからこそ得られることも多いです。

仕事で学んだこと日々の子育てから気づいたことなど、デザイン科のサイトNUDNの中で「キャスター・マッキー通信」として書いています。2人の出産の時期を除いて毎月書き続け、気づいたら今年で12年になります。去年12月には「はやぶさ2」のことを書きました。資料もたくさん読みました。でも、はやぶさ関連の仕事をしたことはありません。笑。調べるのが楽しい、学ぶのが楽しい、感じたことを伝えるのが楽しい。(あ、でもはやぶさの仕事が来るといいな。笑)

日藝には、様々なジャンルを学ぶ学生が集まっています。自分と同じジャンルだけではなく、違うジャンルを学ぶ学生の話を聞くのも刺激になるし、人とのネットワークも広がります。素晴らしい環境だと、卒業して改めて思います。毎日を楽しんで、たくさん学んでください。

〈NUDNサイト〉<http://www.nudn.net>

~出会いを大切に~

穴澤万里子 ○演劇学科 教授



この原稿の依頼を受けて、自分のSEISHUNを振り返ってみた。平和でのどかな高校時代、幼い頃から憧れの地、パリに行くことだけを漠然と夢見て過ごした。高校卒業後に渡仏してからは全てが新鮮で、現実は夢よりもはるかに勝っていた。数々の良い出会いと別れを経験し、気が付ければフランスに渡ってから12年という月日が流れた。だから私のSEISHUNは、年に1度の帰省を終えてパリに「戻る」(パリは青春時代を過ごした大切な場所、ホームタウン。だから今も「行く」のではなく、「戻る」のだ)飛行機の中の決心を十回以上繰り返したことになる。飛行機の中は日常とかけ離れた、特異な時空間だ。大切な家族や友人と久しぶりに再会し、密に過ごした夏の別れと寂しさも相俟って、何処までも続く空を見つめながら自分がどう生きたいか、そのためには次の再会までどうすればいいのか、否応なしに自問し、そして決心するわけだ。機上では平和な年もあれば、意志に燃えていた年もある。涙で前が見えない年もあった。愛する人たちに守られて、「演劇研究」という道に向かって真剣に駆け抜けた、幸せなSEISHUNだったと思う。

今、SEISHUN真っ只中の君たちに望む。あらゆる出会いを大切に!! それは一編の詩、作品、忘れられない風景、言葉、おいしい食べ物、あの人の手のぬくもり、花、本、匂い、星……共に語り合い、分かち合える友人。そして夢を諦めずに見続けて、いつか必ず実現させて欲しい!! どんな偉人のどんな偉業も最初はただの夢や妄想でしかないのだ。ただいかなる場合でも人と関わることなく生きることは不可能だということは知っておかなければならないだろう。そう言う私も人と生きるのは煩わしさより、喜びの方がはるかに多いと心から実感できたのは、実は最近の事だ。私のSEISHUNに大きな影響を与え、本校にも招聘教授としてお呼びしたクラッシュ・バレエの大家、故ウィルフレード・ピオレ師に言われた一言は今も私の座右の銘だ。「あなたの進むべき分野で、気は合わないけれど良い仕事をしていると思う人がいたら、迷わずにその人と仕事をしなさい。仲良しと仕事をしてもあなたは変わらない。あなたと違う人と仕事をすれば新しい自分がきっと見えてくる」。勿論、仕事仲間と友人とは違うだろう。

大学とはそんな出会いの場だと思う。扉は待っていても開かない。自分から開けなければ誰も開けてくれない。明けない夜はないように開かない扉だってないのだ。多くの出会いを通して、他の誰のものでもない、あなただけのSEISHUNを過ごして欲しい。

夢中になれば…

西垣仁美 ○写真学科 教授



新 入生、在学生の皆様こんにちは。

皆様は、どのような学生生活を送っていらっしゃいますか? 私は高校までとは全く違う勉強をしようと思い、それまで押せば書くコンパクトカメラしか使ったことがなく、機材も持たず、経験も皆無の状態で入学しました。ガイダンスの初日に、たまたま隣に座った人から「これから写真展を見に行こう」と誘われ、初めて写真展に行きました。世の中に写真展というものがあることを知りました。また最初の自己紹介では、憧れの写真家について熱く語る同級生に驚きました。そして根幹をなす実習授業では、殆どの人が経験者で、既に撮影も現像もプリントもできるということを知り、来るべき大学を間違えたと思いました。ここは経験者が更にレベルアップを目指して来るべきところだったのだと恐怖を感じました。現像作業をできなかった私は、同じようにできなかった級友3名と課外授業で特別に現像の仕方を教えて頂きました。その時から、授業を休んだら付いていけないと強く思いました。そして今でも親友の、大学で知り合った友達と一緒に座り授業を受けました。写真の授業の内容は難しくて理解できず、先生に「質問は?」とたずねられても、全部わからないため授業内には質問もできませんでした。トンチンカンで初步的な質問に、授業外で、先生は根気よく付き合い、解説して下さいました。そのような私を支えたのは、高校の卒業式で頂いた「高校までは義務教育みたいなもの、大学は自分で選んで行く所ですから、しっかり学んで下さい」という言葉でした。ひっしと皆についていこうと勉強しました。全く白紙だった私が今あるのは、先生方と友人達のおかげです。振り返ってみると頑張っていたなと思いますが、当時はそれすら感じられないほど、ただただ夢中で学んでいました。つらかった記憶はありません。楽しい日々でした。

時は流れ、現在、大学で出会った沢山の友人がいます。今でも写真界で働いている人もいれば、他業界に移った人など様々です。しかし全員が良い友人です。写真の世界は狭いのか、学外でバッタリ同級生に出会います。そのような時は嬉しくホッとします。

おそらく入学時、学年で一番写真を知らない私がここにいるのは不思議です。夢中になれば道は開けるのだと思います。皆様、それぞれの専門分野でも趣味でも、楽しく学び、たくさんの良き師や友人方に出会われ、輝く未来を得られますよう心から願っております。素晴らしい学生生活をお過ごしください。

旅のススメ

鈴木俊崇 ○所沢校舎教務課課長補佐



突 然ですが皆さん、旅は好きですか?

学生時代、私は史跡探訪研究会というサークルに所属していました。歴史や旅の好きな仲間たちとともに、合宿では各地の名所旧跡、お城やお寺などを巡りました。

1年生の夏合宿は、京都への旅でした。新幹線ならば東京から所要2時間20分のところを、「大垣夜行」と呼ばれる寝台ではない夜行列車に乗りました。夕方から品川駅ホームで列に並び、出発まで5時間ほど時間を潰してようやく座席を確保、深夜でも消灯されない明るい車内で眠れない夜を過ごし、早朝に岐阜県の大垣駅着。そこから鈍行列車を乗り継いで、京都に着いたのは翌朝9時でした。合宿中に世界遺産・姫路城へ足を延ばしたのですが、白鷺城とも呼ばれる優美な姿はすばらしく、私が城好きになった原点となりました。この年の京都は最高気温39度の猛暑でとにかく暑く、体力の消耗が激しかったので、帰りはさすがに新幹線を使いました。空調の効いた車内で食べたアイスクリームの美味しかったこと!

学生時代は仲間たちと一緒に旅をすることが多かったのですが、社会人になってからは仲間と時間を合わせるのが年々難しくなったこともあり、一人旅が増えました。一人旅は、制約がなく自由なので、誰に気兼ねすることもなく自分の見たい場所を自分のペースで回れるのがメリットです。また、一人旅は自分自身と向き合う時間がおのずと増えますし、自分のことを誰も知らない見知らぬ土地を訪れるには、独特の「非日常」感があります。旅行中、毎回ひとりで食事をするのは少々味気ないのが玉にキズですが、独身のうちに一人旅へ行かれることをおすすめします。日本国内なら、歴史があり、良質の温泉も豊富で、食べ物も美味しい九州が特におすすめです。

学生の皆さんには、日頃から制作活動などで忙しい日々を送っていることが多いですが、たまには旅行でもいかがですか? 旅は気分転換にもなりますし、刺激を受けることで何か良いアイディアが浮かんでくるかもしれませんよ。

オール日大進学ガイド 「総合大学の理想像をめざす日本大学」

本学を志望する全国の受験生に対し、日本大学の魅力を伝える進学資料として毎年5月に28万部を発行し、無料で配布しているオール日大進学ガイド「総合大学の理想像をめざす日本大学」。受験生に在学生の作品をより身近に感じてもらうために、表紙デザインはデザイン学科の学生が、扉ページの写真は写真学科の学生が制作しています。

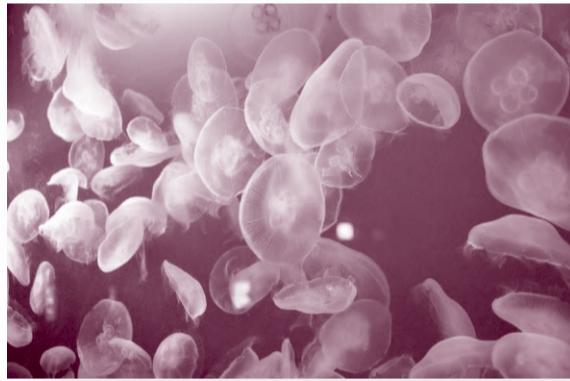
毎年10月に芸術学部内でコンペティションを開催し、最優秀賞、優秀賞、学務部長賞を決定。最優秀賞の作品が、表紙と扉を飾っています。大学創立100周年を迎えた平成元年度版からスタートし、今年で28回目を迎える恒例行事となっており、芸術学部生による若々しく独創的な感覚で、本学を象徴するような表紙デザインとメイン写真を募集しています。我こそはという学生の皆様のご応募、お待ちしております！



2016

【表紙デザインの部】
最優秀賞「に」
豊田 陽

この模様から「に」の文字を見つけられましたか？さて、どこに隠れているでしょうか。見つけてみて下さい。日本大学の頭文字である「に」は、自分の内側から外側に、自分から誰かに、誰かから誰かにと、ものとの繋がりをイメージできる文字だと思っています。何かを伝えたい時には自分の意見を相手に伝えようとしても重要ですが、相手にだけでなく、いろんな方向に視野を広げてみて下さい。こんな使い方があったのか！と、発見があるかもしれません。



受賞するとはまったく思っていなかったのでとても驚きましたがとても嬉しいです。この作品はタイトルの通り各々が自由に芸術に取り組めるようにという意図を込めました。それぞれやりたいことも自分の表現したいことも表現方法も違います。だからこそ、自由に各々の芸術に取り組めるのが日大だと思います。私は入学してまだ2年目になりますがまだまだ吸収できるところたくさんあるので吸収できるだけていこうと思います。

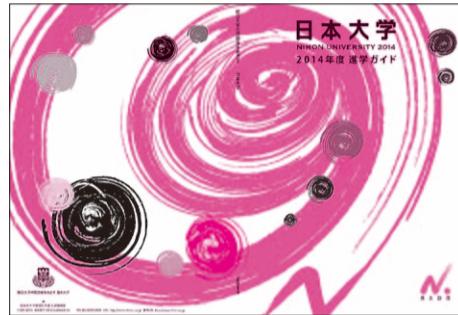


2013

表紙：「十人十色」 外山里香



写真：「幕開け」 高木美佑



2014

表紙：「日大旋風！巻き起こせ!!」 中川美沙



写真：「未来に向かって」 大橋絵莉花



2015

表紙：「ここから飛ぶ」 藤田真帆



写真：「ヒカリ」 重松 駿

今年度の受賞者

【表紙デザインの部】
最優秀賞 豊田 陽 (デザイン1年)
優秀賞 横口怜亞 (同3年)
優秀賞 福田 彩 (同3年)
学務部長賞 古川絵里奈 (同2年)

【メイン写真の部】

最優秀賞 渡邊美保 (写真1年)
優秀賞 植田千晶 (同1年)
優秀賞 山田 陽 (同2年)
学務部長賞 清水奎司 (同2年)

※学年は平成26年度のもの



▲平成26年12月18日に開催された表彰式

受賞者一覧

- 日本大学学長賞(学業部門)
高橋拓也(文芸)
- 日本大学優等賞(学業部門)
依田律子、小林雄一、工藤ゆい、石野美樹(以上写真)
堀内 藍、木崎加奈子、袴田くるみ、坂倉珠水(以上映画)
小柳佑太、小川有紀、矢作香菜子、柳野奈津子(以上美術)
須賀百香、星 淳美、室井笑利奈、平野伸芽(以上音楽)
宮川祥子、吉川里歩、石川舞花(以上文芸)
長尾舞夢、竹田有里、板垣明日香、新田佑梨(以上演劇)
松本佑香、奥山すみ玲、戸上翔太郎、寺門響子(以上放送)
森樹里、湯口果歩、清水詩織、TJONG EKA DEVI(以上デザイン)
●日本大学奨励賞(学術・文化部門)
林田さくらこ(映画1年)、松山 愛(デザイン3年)
●芸術学部長賞
○学業部門
重松 駿、陳 程、竹永 理、荒木玲子、長野柊太郎(以上写真)
中西基樹、杉浦穂奈実、廣中愛子、原田宏美、THILAKARATHNA GODAPITIYA LIYANAGE IRUDINI UMALI(以上映画)
三田村万葉、小川有紀、松本佳巳、石井萌々子、根本祐杜(以上美術)
佐藤里香、愛宕結衣、平田亞樹、室井笑利奈、品川裕太(以上音楽)
村山知美、田中里咲、永沼絵莉子、西 智子、石川舞花(以上文芸)
竹田有里、間所珠世、村岡ちひろ、奥山このみ、原田侑季(以上演劇)
フィオレンティーニチエレステ葵、松本匡史、荒谷雄一郎、宮崎香奈子、三浦菜穂美(以上放送)
関野美奈実、勝野玲於、田中篤郎、渡邊日香莉、室山智樹(以上デザイン)
○その他の部門

去る3月25日に平成26年度卒業式及び学位記授与式が挙行されました。日本大学学長賞・優等賞、芸術学部長賞、芸術学部奨励賞など卒業生、大学院修了生に対する各賞の発表及び表彰がありましたので、学外のコンテストなどで活躍された受賞者と併せてお知らせいたします。

- ◆ 石川真里(映画)、中野達也(放送)
●芸術学部奨励賞
◆ 彦根藍矢(写真)、岩崎友明(映画)、小柳佑太(美術)、上田真平(音楽)、矢代羽衣子(文芸)、峰岸優衣(演劇)、井上祐加里(放送)、高松 優(デザイン)
●芸術学部金丸重嶺賞
◆ 青木忠英、杉山 慧、須崎将佳(以上写真)
●芸術学部渡辺俊平記念賞
◆ 藤原真悠(映画)
●芸術学部川野希典賞
◆ 水田彩花、喜多甲陽、橋本真衣、市川真由香、杉原早紀、矢田真理子(以上演劇)
●芸術学部答見有弘賞
◆ 松村陽香(映画)
●芸術学部大竹徹賞
◆ 木崎加奈子(映画)
●芸術学部八木信忠賞
◆ 武藤あすか(映画)
●芸術学部湯川制賞
◆ 坂本 如(文芸学)、李 瑛恩(映像芸術)、桐生ミナミ(造形芸術)、谷 亜矢子(音楽芸術)
●芸術学部澤本徳美賞
◆ 石田智美(文芸学)、桑田恵里(映像芸術)、廣瀬聰平(造形芸術)、佐藤 圭(音楽芸術)
●生産工学部賞
◆ 恩田裕理恵、小椋つぐみ(以上美術)
●2016年度「日本大学進学ガイド」
◆ 上記1つのハートをご覧下さい
●写真学科卒展 2015

- ◆ 新写真派協会賞 杉山 慧(写真)
○写真学科奨励賞 池田莉子、御座岡宏土、渡邊裕貴(以上写真)
●映画学科奨励賞
◆ 久我純花、袴田くるみ、加藤法子、黒田早紀、植村美紀、中村美栄、佐藤ケイ(以上映画)
●映画学科選奨
◆ 渡部瑞貴、長崎千穂、角岡伸哉、櫻井翔太、堀内 全、高 勇人、酒井朝子(以上映画)
●映画学科特別賞
◆ 庄司 句、高坂聖太郎、上村 瞳、宮本 舞、武井俊幸、篠原みづき、山田茱萸紗(以上映画)、菊池百合子、清水禎孝、安部結莉香、松村綾香(以上映画3年)
●アートライティング賞
◆ 西澤広夢(映画)
●映画学科コダック賞
◆ 渡邊未来、山口 悠、近藤和峰、糟谷麻奈、柴野琳々子、神永美沙紀、角 健士、坂倉珠水(以上映画)、朴 基俊、伊藤諒司、森田結貴、渡邉康太、藤田 啓、橋口万里奈(以上映画3年)
●江戸クリエート賞
◆ 林 晃平、渡部真実、伊尻悠希(以上映画3年)
●日本大学人権啓発ボスタークンクール 大学生の部
◆ ○優秀賞 古川絵里奈(デザイン2年)
○特別賞 大多和未枝(デザイン3年)
●第12回建築展ボスタークンペ
◆ ○優秀賞 西野夢実(デザイン3年)
●第27回ACC学生CMコンクール
◆ ○銀賞 松山 愛(デザイン3年)
●日本タイポグラフィ年鑑2015 学生部門
◆ ○入選 出水友美子(デザイン3年)
- 第三回 文字デザインコンテスト
○最優秀賞 木下由紀子(デザイン2年)
○優秀賞 若元爽香、森田隼矢(デザイン2年)
○奨励賞 張 欽(造形芸術)、岡田晃青、木下涼香(デザイン2年)
●版画フォーラム2014
○入選 細濱光美(デザイン2年)
●JPDA デザインアワード
○準グランプリ 下間 碧(デザイン3年)
○優秀賞 土屋真子、金 志原(デザイン3年)
○奨励賞 出水友美子(デザイン3年)
●ACジャパン CM学生賞
○グランプリ 「誰かの一食」
◆ 斎藤 漂、藍原 哲、中島涼香、高橋弦人、岩河笑愛、塙谷明日美、武藤由莉、金山甲斗、長島かずな(以上デザイン)
○準グランプリ BS民放賞 「1の大切さ」
◆ 江間結衣、荒谷穂波、渡辺睦未、本間那月、池田 亮、望月ちひろ、中木屋峻(以上デザイン)
○表現技術賞 「自転車ドミノ」
◆ 朝倉舞彩(映画)、金沢知枝(デザイン)、海野 茗(写真)、三橋飛鳥(放送)、喜多甲陽(演劇)、塙谷明日美、大橋靖弘(以上デザイン)
○優秀賞 「歩きスマホ、つづけますか?」
◆ 田中佑果、佐藤萌香、佐藤可奈子、吉野 新(以上デザイン)、山田聰美(音楽)
○優秀賞 「日本語ブズ」
◆ 弓削田麗雅(映画)、間所珠世(演劇)、田中佑果、齊藤 凛、TJONG EKA DEVI(以上デザイン)、弓削田淳史(放送)、黒川 遼(音楽)、草刈 孝(写真)、栄 美紀(放送)、長尾舞夢(演劇)、角 健士(映画)

※学年は26年度のもの／学年表記のないものは今春の卒業生

写真学科**◎日本大学芸術学部写真学科2015卒展**

毎年恒例の卒業展が本年は3会場で開催されました。

●全体展(参加者全員の作品展示:各1~3点)

会場: 江古田校舎芸術資料館にて 2月16日~28日
出展作品の中から下記の優秀作品が選ばれました。

○新写真派協会賞

杉山 慧「のぞみ世代」

○写真学科奨励賞

池田莉子 「夢のあと」

御座岡宏士 「DEVELOPMENT」

渡邊裕貴 「amais vu」

●全休展(参加者全員の作品展示:各1~3点)

会場: 新宿ニコンサロン(ニコンサロンbis新宿)
3月7日~9日

●選抜展

卒業制作の中から9名を選抜、複数作品による展示が行われました。

出展者: 青木忠英、池田莉子、御座岡宏士、須崎将佳

杉山 慧、重松 駿、竹永 理、陳 程、渡邊裕貴

会場: ポートレートギャラリー(四谷) 3月5日~11日

●平成26年度 大学院映像芸術専攻修了制作展

江古田校舎 芸術資料館 4月9日~5月8日

●平成26年度 卒業・修了制作優秀作品展

平成26年度卒業・修了制作の中から、下記優秀作品を江古田校舎東棟写真ギャラリーで5月から順次展示します。

○芸術学部長賞

重松 駿 「日本写紀」

陳 程 「Horizon」

竹永 理 「#shiftE」

荒木玲子 「眩耀都市」

長野松太郎 「500°C -Metal Plating Factory-」

○芸術学部奨励賞

彦根藍矢 「どちらでもないもの -Beides-」

○金丸重嶺賞

青木忠英 「百年写真館」

杉山 慧 「のぞみ世代」

須崎将佳 「山田線 一汽車のない日々」

○澤本徳美賞(大学院)

桑田恵里 「re-unification」

○黑白ファインプリントの名作展

アンセル・アダムス「自由と平等の下に生まれて:

マンザナー戦時移住センター」展

江古田校舎 芸術資料館 5月12日~6月5日

映画学科**◎学生作品の受賞**

映画学科の実習作品が、以下の各賞を受賞しました。

○平成25年度映像III『さえずり』

第2回 FOXムービー プレミアム 短編映画祭 2014 優秀賞

○平成25年度卒業計画『蘭を煮る』

京都国際インディーズ映画祭 グランプリ

○平成25年度卒業制作『還るばしょ』

第12回 うえだ城下町映画祭自主制作映画コンテスト

審査員賞**○平成25年度卒業制作『タマとわたし』**

第13回 JCF学生映画祭in山形 長編部門グランプリ

○平成22年度卒業制作『飛ぶツチノコ』

第13回 JCF学生映画祭in山形 長編部門準グランプリ

○宮澤教授が文化庁映画賞を受賞

宮澤誠一教授が、平成26年度文化庁映画賞映画功労部門を受賞しました。永年にわたり日本映画を支えてきたことに対する顕彰です。贈呈式は、10月23日に六本木ヒルズグランドハイアット東京にて行われました。

○練馬ゆかりの名作映画会を開催

1月12日に練馬文化センター小ホールにて、練馬区文化振興協会と芸術学部の連携事業「練馬ゆかりの名作映画会」が開催されました。練馬区にゆかりのある映画『五番町夕霧楼』『五瓣の椿』を上映し、映画学科の平成25年度卒業制作『母が帰ってくる』『きっと、僕たちは』を併映しました。

○助手展2014に参加

1月9日から20日まで江古田校舎にて開催された、「助手展2014」にて、映画学科助手の作品が展示されました。この展覧会のために助手の海部光一、秋山佳那、小野寺志織、高橋泰治、秋田美月、千葉佐記子が共同制作した劇映画や、個人制作の映像作品、絵画を展示しました。

○音楽の展覧会に参加

12月20日、21日に江古田校舎にて開催された「音楽の展覧会」に映画学科教員、学生が参加しました。本展覧会は、「平成26年度文化庁大学を活用した文化推進事業」である、日本大学芸術学部インターフェクション・プロジェクトです。

展示される映像作品を奥野邦利教授が監督、増田治宏准教授と海部光一助手が撮影、野村建太助教が監督助手を担当しました。2月25日、26には、「音楽の展覧会+ライブコンサート・並置/交差」として、東京オペラシティ・リサイタルホールにてライブ演奏と映像上映を行いました。

○S.T.E.P. 開催

3月15日から20日まで、「大学連携による映画人育成のための上映会 S.T.E.P.」がK's cinemaで開催されました。本上映会は、文化庁委託事業「平成26年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」として日本大学が制作しました。全国映画教育協議会加盟の14大学から推薦された作品を上映、プロの映画人にによる講評を行いました。

○Focus in 2016 開催予定

昨年度の卒業制作と映画演出III・映画技術IIIで制作された作品を一挙に上映する上映会「FOCUS IN 2016」の開催が予定されています。詳しい日時は、映画学科特設サイトをご覧下さい。

美術学科**●太陽展**

5月22日~6月8日 日動画廊本店

〒104-0061 東京都中央区銀座5-3-16

<http://www.nichido-garo.co.jp>

出品: 福島唯史、設楽 俊、櫻井孝美(非常勤講師)

●Volant(仮)

6月15日(月)~25日(木) ギャラリーセイコウドウ

〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-21 清光堂ビル5

http://www.ginza-seikodo.co.jp/gallery1_004.htm

出品: 設楽 俊

張 麗寧(2009年大学院絵画コース修了)

大山智子(2011年大学院絵画コース修了)

渡邊大介(1999年絵画コース卒業)

音楽学科**●日本ピアノ調律師協会主催 第16回 新人演奏会**

東京文化会館 4月29日 17:00開演

ピアノ独奏: 平田亞樹

●第85回 読売新聞主催新人演奏会

東京文化会館・大ホール 5月5日~6日

ピアノ独奏: 平田亞樹

バス・トロンボーン独奏: 室井笑利奈

ピアノ伴奏: 浦本 雅

ソプラノ独唱: 愛宕結衣 ピアノ伴奏: 菊竹 南

作品発表: 佐藤里香 ピアノ独奏: 大澤実季

●ヤマハ管楽器 新人演奏会 ヤマハホール

6月8日 第33回クラリネット部門

クラリネット独奏: 松尾絢華

6月10日 第31回金管楽器部門

トランペット独奏: 須賀百香

●ムラマツ・フルートデビューリサイタル

日時未定 東京オペラシティ・リサイタルホール

フルート独奏: 小平理乃(リサイタルの形で演奏します。)

文芸学科**●第13回江古田文学賞発表!**

第13回江古田文学賞は、平成26年8月31日に応募を締め切り、予選選考の後、4篇が最終候補作品として選出されました。その中から同年10月23日の最終選考会を経て、以下の通り受賞作が決定し、「江古田文学87号」に掲載されました。応募総数は120篇でした。

○江古田文学賞: 該当なし

○佳作: 「ミミ」 坂本 如 (日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程文芸学専攻2年)

また、平成27年1月23日に江古田校舎西棟5階文芸ラウンジにおいて授賞式と受賞記念パーティーを行いました。

●第8回 宗祇白河紀行連句賞に文芸学科生2名が入賞!

第8回 宗祇白河紀行連句賞にて、下記の学生の作品が入賞しました。

○佳作: 萩原涼加(文芸学科2年生)

花ざかり雲井に見えぬ山もなし (宗祇)

羊の毛刈り香る太陽 (萩原涼加)

口の中溢れるオレンジ夏告げて (〃)

○奨励賞: 小村はる(文芸学科1年生)

艶めくや春の雲浮く闇の湖 (狩野康子)

花の便りに聞く息違い (小村はる)

生きている螢をつかむ指白く (〃)

●「日藝の卒博」EXPO NICHIGEI 2015・文芸を開催しました!

日本大学芸術学部合同卒業制作博覧会において文芸学科は平成26年度卒業制作・論文の展示を行いました。

日時: 3月14日~22日 10:00~18:00

場所: 西棟5階 文芸学科資料室&ゼミ室

●第1回 文学フリマ金沢に参加します!

文芸学科は、第1回文学フリマ金沢に参加します。平成26年度発行のゼミ雑誌を中心に展示・配布を行います。

日時: 4月19日 11:00~16:30

会場: ITビジネスプラザ武蔵 5F・6F

演劇学科

演劇学科の前期実習発表の日程が以下の通りに決まりました。新年度のスタートと共に、学生たちが稽古に汗をながしております。ぜひ足をお運びいただけたと幸いです。江古田校舎・大階段が目印の中ホール、そして実験的なスペースの小ホールでお待ちいたしております。

●3年生総合実習IIA(演劇)

6月25日~27日 江古田校舎北棟・中ホール

●3年生総合実習IIB(洋舞)

7月3日~4日 江古田校舎北棟・中ホール

●3年生総合実習IV(演劇)

7月23日~25日 江古田校舎北棟・小ホール

●4年生卒業制作(日舞)中間発表

7月11日 江古田校舎北棟・中ホール

※最新情報は学科ホームページでご確認下さい。

<http://theatre.art.nihon-u.ac.jp/>

放送学科**●西山遙翔君が大学Nコンで第一位**

放送学科4年でオーディオ無線研究会所属の西山遙翔君が、第31回

NHK全国大学放送コンテストのアナ</